

# Scramble Shot

と歌っていた。ハルテリウスのフィオルディリージは初役だが技術的に計算されたテクニックで歌いきった。ドラベッラを歌ったボニタティスは充実した声を聴かせ、1幕のアリアが素晴らしかった。ヤンコヴァの演じるデスピーナは生き生きとしていたが、尻軽女過ぎるきらいもあった。ヴィドマーはドン・アルフォンゾ役のデビューだったが、明瞭なイタリア語で物語を進め、(終演後のパーティで、そう話すとパートナーのバルトリは「自分の指導」だ、と誇らしげだった)、ドローレは立派な声でグリエルモを男らしく演じたが、今回一番素晴らしかったのは、フェランド初役のカマレーラだろう。“Un'aura amorosa”を完璧に歌いきり、舞台奥に消えた後も観客の拍手が鳴り続いた。アンサンブルになると、主旋律としては弱いところが残念だが。

1時間半の前半で大満足感を残してくれたのに、後半は間延びしてしまう。何も新しい事は起こらず、テンポもどんどんゆっくりになっていく上、ほぼノーカットで4時間の公演に歌手達も疲れを見せ始め、最後は「やっと終わった」感を抱かせてしまった。演出のベヒトルフも、細々したアイデアをちりばめ、現代風に楽しめる劇に仕上げているのだが、大切なアリアのバックで人が動き過ぎ、歌を邪魔するなど、やはり俳優出身の欠点かもしれない。しかし、夏休み直前でリラックス気味の聴衆を、より楽しませてくれたのは確かだ。(中 東生)

## チュールヒ歌劇場《コジ・ファン・トゥツテ》プレミエ

今シーズン最後のプレミエは充実していた。序曲では四角四面な指揮だったヴェルザー=メストも、歌い手が入ってくると、色彩を帯び、歌手陣も全員のびのび